

第1回 食と命の教室 2018.2.17

■初めに

高柳です。私は1950年生まれで今年2018年ですから、今年で68歳になります。この地で生まれ生きてきました。ご先祖様は証拠があるまでで元禄、つまり300年ぐらい前からこの地に住んでいることになります。その前も証拠がないのだけど、まあ長くこの地に住み着いてきたんだと思います。

この土地には大須賀神社というのがあります。鎮守様ですね。神主に聞いたら、西暦で910年ぐらい、平安時代からあるという人もいます。日本は天皇を中心に国作りを行ったのですが、平将門が常陸の国にいましたよね。平将門、知らない？本当？

京都に朝廷を作るわけですが、それまでは貴族と天皇で治めていたわけですが、ところが平将門は当時としては画期的な親分で、畑を作った者はそこを自分の物にして良い、と初めて働く側の物にした、という親分です。

そうすると朝廷は困るんです。そのために、平将門を討とうとなって、呪い殺すために出来たのが成田山ですね。まあ、その頃に我が村の神社が出来た。神様には産土神と菅原道真を祀った諏訪神社のように人を祀る神社の2つありますよね。大須賀神社は産土神ですね。そこで五穀豊穰、天下泰平などを願って村作りをしてきたんです。

だからこの辺りは1100年ぐらいの歴史があるんです。その先祖の端くれとして代々続いてきたのが我が家です。

江戸時代までたどると、名前が全部、源右衛門なんです。文化、文政、享保など墓石の名前がみんな源右衛門。高柳源右衛門という名前が、歌舞伎の世襲のように全部続いてきたんです。それが明治まで。明治からそういったものは、この国はダメにしたんです。古い名前を権力で禁止したんです。旧来の名前を禁止した。だから戦後の続いたものを切ってしまう。そして我が家は1町歩(=約3,000坪)の田畑を作ってきて、それが私の縦糸です。

私が農家を始めたのは18歳だからもう48年やっていますね。私たちの年代が旧来と近代の両方の農業を知っている境の世代なんです。

1960～1970年代に、この国は近代農業を取り入れたんです。化学肥料、化学農薬、機械化…大規模化ですね。それと農業の中身が、食べるための農業から経営のため、金を儲けるための農業になったんです。

私は農業高校に行ったんですが、それまではいかに生命を大事にするかというのを教えていたのが、それがいかに効率良く育てるか、に変わっていったんです。国や県の指導は、いかに効率よく作るか、という流れになったんです。

化学肥料の方が効率が良いんです。例えば、堆肥を作るには山から落ち葉を拾い集めて来て、牛さんや豚さんの糞を入れて混ぜて、1年積んで、と時間がかかるんです。あと魚も使われていましたね。日本ではニシン、イワシなどの魚を干したものを畑に使っていました。そういったものが無ければ綿などは作れなかったんです。

しかし1960～1970年から、それを化学肥料にしろ、と言われたんです。化学肥料だったら袋に入った20kgぐらいのものをパ〜っと振ってしまえば終わり。1年かけて堆肥を作るより早いんです。でも、仲間で「化学肥料とは良いとか言うけど、違うよな？今まで先祖が土作りをしてきたから、今は穫れているけど、これからおかしくなるよな」と話し合っていたんです。

「※レイチェル・カーソン」は知ってますか？1962年に『沈黙の春』を書いた人で、アメリカで1番にPHCや「※DDT」の危険性を訴えた人で、『農薬は効能はあるけど、マイナスの部分もある。つまり。生物が死んでしまう。そういうのは核と同じだ』と言った人なんです。農薬はいったんばらまかれたら、もう回収できない、人間が制御できない。核も同じ、ということなんです。福島も同じですよ。人間が入ったら死んじゃうんだから。1962年にそれを訴えたんです。それが『沈黙の春』です。是非、読んで下さい。

「※レイチェル・カーソン」…1907年生まれのアメリカの海洋学者。農薬で利用されている化学物質の危険性を取り上げた著書『沈黙の春』(Silent Spring)は、アメリカにおいて半年間で50万部も売り上げ、後の日本の有機農業農家に多大な影響を与えた。他にも『センス・オブ・ワンダー』など多大な影響を今も与えている本を書いている。

「※DDT」…有機塩素系の殺虫剤。戦後、衛生環境の改善のためにアメリカ軍がシラミなどの防疫対策として用い、外地からの引揚者や、一般の児童の頭髮に粉状の薬剤を浴びせたり、市街地に空中撒布することもあった。その後、農業用の殺虫剤として利用されたが、1960年代に出版されたレイチェル・カーソンの「沈黙の春」により取り上げられ、その残留毒性の危険が世界に広く広まり、日本でも1971年に使用が禁止になった。

1976年の「※有吉佐和子」の『複合汚染』も読んでみて下さい。我々の環境がいかに化学物質に汚染されているかを書いた本です。

「※有吉佐和子」…1931年生まれで『恍惚の人』や『複合汚染』などの小説家。複数の化学物質が合わさることで、相乗的な汚染が起きることなどの環境汚染問題の警鐘をならしたことで、「沈黙の春」と同様に多くの有機農業農家に影響を与えた。

1960年代から九州の有機水銀の水俣病、富山の cadmium のイタイイタイ病、もう1つダイオキシン。そういったものが出てきて、世界的に害があるとわかっているけど、ばらまかれた。妊婦さんがマグロを食べちゃいけない、というのもそういった流れなんです。

私の個人的な体験はおばさんなんです。38歳か36歳でガンで亡くなったんです。治療の施しようがない、ということで、我が家で預かって半年間、面倒を見たんです。その時に思ったのが、とても悲しかったんですけど、なんで人はガンになるんだろう？って。

お茶の水クリニックの「※森下敬一」さんは知ってますか？もう90歳を過ぎているから死んでしまっているかもしれないけど、その人は「ガンは食事でなる」とも「ガンは食事で治る」とも言った人です。

「※森下敬一」…大学の研究室で「食物と血液」を課題に実験研究を積み重ね、血液は骨髄ではなく腸で作られ

るということを見。20年の研究生活後、1970年にお茶の水クリニックを開業。「ガン・慢性病の食事療法」を旗じるしにすべての病気は「血液のよごれ」が原因であり、「浄血」こそ万病の根本療法とし、また、食物は「生命をつくるもと」であり、生まれてから成長し死に至るまでの食物の質が「血液の質」をつくることを提唱。

農業の本来の姿は？と考えていくと、近代農業の化学農薬と化学肥料は本来の姿ではない。日本で最初にそう言ったのが「※福岡正信」さんですね。の『わら一本の革命』を書いた人で、自然農法、つまり自然の力をいかに引き出すか、というのを提唱実践した人です。まあ、世界中がそういうった動きがあって、食べ物が足りない時代が続いて、「※緑の革命」で近代農業が始まったんですが、「※世界救世教」の岡田茂吉、福岡正信、あとはドイツでは「※シュタイナー」などですね。シュタイナーは教育や医学など現代のものに疑問を持った人ですね。

そういうのを福岡正信さんが最初に日本では提唱したんですね。

「※福岡正信」・・・1913年生まれ。自然農法の草分け的存在。不耕起(耕さない)、無肥料、無農薬、無除草を特徴とする自然農法を行うだけでなく、その思想、哲学、著作『わら一本の革命』は後人に多大な影響を与えた。「粘土団子」と呼ばれる、様々な種を100種類以上混ぜた団子によって行う砂漠緑化を実現した日本人として世界で有名。

「※緑の革命」・・・1940年代から1960年代にかけて、高収量品種の導入や化学肥料の大量投入などにより穀物の生産性が向上し、穀物の大量増産をしたことを指す。品種によっては反収量は2倍以上に増大したものがあるが、在来種に比べ洪水や病虫害に弱く収量が伸びないものもあり、アジア各国の国内における貧富の差はかえって拡大したという人もいます。

「※世界救世教」・・・岡田茂吉が昭和10年に作った新宗教。昭和20年代より自然農法という名称で、独自の無農薬有機農法を研究、実践、推進してきた。MOA美術館なども運営。

「※シュタイナー」・・・ドイツの人智学に基づいた教育者、哲学者。彼が提唱したと言われている自然農法、循環型農法がバイオダイナミック農法。鉱物製肥料の使用を中心としたそれまでの農法を否定し、土壌と植物、動物の相互作用だけでなく、宇宙の力を土壌に呼び込むために太陰暦・占星術に基づいた「農業暦」にしたがって種まきや収穫、調合剤の攪拌などを行う。例えば牛の角に水晶粉を入れ、宇宙エネルギーを取り込んだものを畑に撒くなど。

今は98%、農薬を使う慣行農法と言われているのが当たり前。おかげさま農場は30年目ですが、30年前は変わり者の集団でした。無農薬なんて出来るはずがない、と言われたんです。今はようやくそういう話は無くなりましたが。

1971年に有機農業研究会が出来た。その時に有機という言葉が出来たのですが、それが2001年になって有機JAS法が出来て野菜に有機農産物という言葉が出来たんです。その後、「※有機農業推進法」が議員立法でできて、全国の有機農業をやっている仲間が集まって「ようやく市民権を得たな」とみんなで言ったものです。ともかく農業がおかしくなっているということと、食がおかしくなっている、としみじみ思うのです。

「※有機農業推進法」・・・化学肥料や農薬、遺伝子組換え技術などを用いない「有機農業」を推進するために、2006年12月に施行された法律。JAS法に基づく取り組みだけでなく、環境への負荷が低い農業を広く対象とし、自然循環機能の増進や農業生産に伴う環境負荷の低減、消費者が有機農産物を入手しやすい環境づくりなど

について定めている。

近代農業は農薬が前提ですが、人間も注射や薬に頼る。それは健康じゃないでしょ？農業も同じで、じいさんの代に農薬は無かったんです。農薬が無ければ農業は出来ないというのは嘘でしょ？

また、みんな、無農薬だから良いというけど、それは目的じゃないんです。自然の力で育ったものを頂くのが良い、と思うんです。有機だからといって良いわけじゃないんです。「堆肥を30トンも40トンも入れたら良いというわけじゃないですよ？」と、ちょっと前に、あるジャーナリストが来て言っていました。ある大手生協でそういったところがあったそうで。そういったところで育った野菜は硝酸体窒素が1万ppmとかで、そんなのは有機だから良いわけじゃない。我々の先生は自然なんです。

じゃあ、自然の豊かさは何か？人間が手を加えなくても繁茂するんです。日本の緯度は北から南まで20~45度で、放っておくと雑草とか木々がわぁ〜と繁茂するところに位置しているんです。そういった力を活かそうと。

それともう1つ、人間の生き様がこのままで良いのか？私たちが知り合ったこと、学んだことを、私はもう死んでいく身ですから遺言を残そうということで、片岡君が事務局をやってくれるので、こんな教室をやっています。

ということで、おかげさま農場では最近はおくたびれたのでやっていませんが、それまで毎年200人とか多い時には700人とかの人を呼んで、現場に来て下さい、現場を見て下さい、というのをやってきました。自分の食べ物がどう作られるのか見て下さい、どういった現場なのか見て下さい、とやってきました。

しかし、日本人は自分の命がどこから来るのかわかっていないというか、わかろうとしていない。私はとても危機感を持っています。というのは、人類はこのまま滅びるんじゃないかと。これだけ化学物質が出てきて人間に障害が出ないわけがない。

少なくとも私の知っている範囲では、昔はアトピーとかアレルギーとかいうのは無かったんです。聞いたこともなかった。化学物質が原因の80%はあると私は見っていますが、生物学者に言わせると、『化学物質は生き物にとってこれほど不自然な物質は無い』と言われてるんです。自然環境にもありますが、食品添加物は年間1人5~6kg、日本では食べているんですよ。着色料、増粘剤とかですね。私の言っているのは化学物質の添加物ですよ。豆腐のにがりとかは良い添加物です。そうじゃなくて人間が作り出した発色剤とか防腐剤とかが、年間60~70万トン作られているんです。日本の人口1億2千万で割ると、1人年間5~6kg食べているんです。私はほとんど食べていないから、みなさん、私の分も含めてもっと食べているんでしょうが(笑)

だから私は農薬より食品添加物の方が危険だと思うんです。みんなそれを問題と思っていないんですよ。かつて無かった物で起きるものが文明病と言われてるんです。

また人間の生理もおかしくなっていて、例えば生殖に関する病気、不妊、奇形なども出てきている。約30年前にね、サルの奇形のレポートを読んだんです。野猿ではなく、人間がエサをあげて育てているサル園で生まれた子ザルの1~2割は奇形だそうなんです。軽いのは指が1本無いとか多いとかで、ひどいのは片足が無いとか無脳症とか下半身が無いとか。これは何なのか？取材者が調べていったんですが、園主は「人間が食べるもの以外は与えていません。ただ、園の一番の経費はエサなので、どうしても一番安いものになってしまうんです。そうすると外国のものが多くなるんです」と言うんです。

また、この話と関係するのですが、有機農業研究会は毎年全国大会を開いているんです。そして新潟大会というのがあって、そこに九州にも水俣病がありましたし、新潟阿賀野川に有機水銀が流れ混んで出た水俣病がありましたね。そこで熊本大の「※原田先生」の話の聞いたんです。みなさん、日本人の寿命が延びたというのは出生時、つまり0歳の死亡率が劇的に減ったんです。昔は5~6人産んだけどそのうちで亡くなる子が出てても仕方ない、という感じだったんです。0歳と80歳が亡くなると平均寿命が40歳。医学で新生児の死亡率が減ったんですね。それでも0歳の子供が死んじゃう。「その一番の原因は何だと思いますか？」という話だったんですね。それが奇形児だ、と言うんです。

※「新潟水俣病」…最初に水俣病の発生が確認されたのは1956(昭和31)年で、熊本県の水俣湾周辺で発生したことにより「水俣病」という病名が付けられた。新潟県では、1965(昭和40)年に阿賀野川流域で発生が確認され、熊本水俣病に対し第二水俣病あるいは新潟水俣病と呼ばれている。

「※原田 正純」…熊本大学医学部で水俣病を研究し、当時の医学的常識では胎盤は毒物を通さないとされていたが、胎盤を通過して胎児におこったメチル水銀中毒であることを証明し、世界で初めて胎児性水俣病を見いだす。2012年に亡くなるまで、常に患者の立場に立ち、「水俣病の小なる原因は有機水銀であり、中なる原因はチッソが廃液をたれ流したことであり、大なる原因は人を人としてあつかわなかったことにある」とし、晩年は水俣病から多くの社会の問題や在り方、教訓を学び取ろうと熊本学園大学を拠点に「水俣学」を提唱していた。

子宮の中で精子と卵子が合体して大きくなっていくわけですが、放射能が悪いと言われているのと同じで、化学物質が細胞が分裂している時に入るとおかしくなっていく。このお話は8年前に聞いた話なんですね。30年前にサルの奇形のレポートを見て、「いずれ人間に来るな」と思っていたのが実際に来たな、というのが私の感想だったんです。それが今では奇形どころか命が誕生しないことになってきた。男性の精子が億単位だったのが、3000~4000万になってきた。生命力がそこまで落ちてしまったんです。また子宮内膜症などもありますよね。命の形がおかしくなってきた。そういう時代が来てしまっている。

話を元に戻して、農の世界もそうなっているんです。つまり、形や見た目さえ良ければよい、となっている。大企業はろくなことをやらないし、自然を受け入れられない日本になってきている。例えば、市場でサツマイモが1口虫に食われていると文句になる。私は他の国、20か国ぐらい歩きましたが、どこでもマルシェがあって、ニンジン1kg、5kgちょうどいい、といったような感じで、大きい小さい、まっすぐまがっている、そういうのがごちゃ混

ぜに入っているのが当たり前なんです。ところがこの国は、まっすぐなのがキュウリ、虫食いのないのがサツマイモ、として、自然を受け入れられない国になっているんです。農薬やら余計なことを広め、また農業を教えないことも決めたんです。

私たちは1年単位の生活を組み立てているんですが、今の時代は月単位で何でも組み立てている。本来、人というのも自然の一部なのですから、1年単位のはずなんです。だからこの教室も1年という単位でやっています。1年のその時期その時期の仕事をちょっとお手伝いしてもらいながら、1年の流れを体験してもらえたらと思います。

■有機農業の考え方

有機農業という事をあまり知らないという方もいると思いますので、覚えておいてほしいのですが。周りの生存基盤というのは、みんな地球が作ったものなんですね。自然は凄いでしょ？放っておけばたちまち緑いっぱいになる。それはやはり土の力ですね。有機農法なり自然農法なり基本は土です。北緯20度～40度で土が30cm出来るのに1000年かかるという学者もいます。それは耕土とも表土ともいわれる土のことです。1年で緑が生えてくる。やがてそれが枯れるでしょ？それが土に還る。それをオケラやミミズが食んで、うんちして、それを微生物が分解して土になっていく。

土というのは種が落ちたら、芽が出て体が出来て花が咲いて実が出来る、そういう力を土は持っているんです。しかしそういう力を人間は奪ってしまう。例えば、今はホウレン草が美味しい時期ですが、放っておけばとう立ちして花を咲かす。しかし、その前に人間は奪っちゃう。本当なら根が腐り、葉が落ち、1年経てばまた実を咲かす。それを奪ってしまう。だから奪ってしまった分は還す、それが堆肥の意味なんですね。

ということで、有機農業や自然農の考え方は、生きてたものを土に還していくことで土作りをする、というのが何よりの基準なんです。

■1000年続く里山と100年前に開墾された里山

<山すその田んぼ道で>

ここは昔から田んぼをやってきた場所なんです。私なんかの年代だと地形を見ると大体、「あ～、ここは昔から人が住み着いてきたところだな」とわかるんです。それは水なんですね。ここは水が沸くんです。向こう側の山に蓄えられた水がコンコンと沸く。昔は人が生きていくために必要なのは水だったんですね。水が無いと田んぼが出来ません。だから、こういった山すそにへばりつくように人は住み着いたんです。

<今回は歩きませんでしたが、大根を抜いた山の上の畑について>

※高柳さんの説明した田んぼは最低1000年の歴史はある場所ですが、大根を収穫した山の上の方の畑は「開墾場」で、明治から昭和初期までに開墾されて出来た畑で、歴史としても100年ほどの畑です。それまではクヌギやブナといった森だったところを、明治以降、政府が開拓・入植を推奨して、入植してきた人達が開墾して出来た畑の1つです。こういったところが全国各地にあり、例えば、落花生で有名な「八街(やちまた)」は、千葉県で8番目に大規模に開墾された大畑地帯なので「八」という数字がついているそうです。

■今日、種を蒔いた夏野菜について

今日、蒔いたのは2週間ぐらいで芽が出てきます。そのあと子葉、つまり種の葉っぱが出て、本葉が出て、今日から1か月後にポットに植え替えます。定植が4月下旬～5月上旬なので約80日ぐらいナスやミニトマトは植え替えるまでにかかる。そして約3カ月～約100日かけて実る。反対にウリ科は2カ月もすれば大丈夫。3月に入ってから種まきをします。

質問：ミニトマトの受粉はどうしていますか？

→何もしません。勝手にハチさんとかがしますから。みなさん、「※ネオニコチノイド」という農薬、知ってますか？ミツバチを全滅に誘い込む性質の農薬としてヨーロッパは禁止し、日本はアメリカのいいなりだから、大丈夫、ということで、規制緩和、ということで10ppmだった規制を40ppmにするというわけのわからない国なんです。農薬といっても接触性といって直接かかるので死ぬものと、植物の中に入って、浸透性というのですが、それを虫が食べると死ぬ、というトウモロコシを人間も食べているんです。

彼らの言い分は、「今まで1トン入れていた農薬が、500kgで済む」というんです。でも、それだけ強力なわけで、訳が分からない説明をしている。

環境ホルモンのようなものだから、ミツバチが狂っちゃうんです。そしてミツバチがいなくなって大変だ、となっている。というのは種が残らないから。花粉などを媒介する役割をしていたのがいなくなっちゃったんだから、だから社会問題となっているんだけど、日本はどうなんだろう？

「※ネオニコチノイド」…人体に害毒が強い有機リン系農薬に代わって登場した、昆虫の中樞神経を狂わせる農薬。果物、野菜、稲だけでなく、一般家庭のガーデニング用、シロアリ駆除、ペットのシラミ・ノミ取り、ゴキブリ駆除、スプレー殺虫剤、新築住宅の化学建材など広範囲に世界的に使われている。働き蜂が巣に戻らず群体ごと消滅してしまうCCD(蜂群崩壊症候群)と呼ばれる現象が全世界に広がり、その原因の1つと考えられることから、EU全域では調査を進めつつ、ネオニコチノイド系農薬5種のうち3種を2013年12月より2年間暫定的に、使用が原則禁止となった。なお、人や哺乳類には毒性が低いとされるが、実際には頭痛、湿疹などを引き起こす原因となっているという医者もいる。日本の残留農薬基準も、作物によるが、EUの3倍～500倍、アメリカと比べても大体2～10倍と大きい。

質問：有機農業で認定されている農薬は大丈夫と言われていますが、薄いからなんですか？

→良くわからないけど、やらない方が良いですよ。農薬と言うのは開発したときは安全だ、ということですが、20年経つと人体実験の結果が出るんでしょう、半分が販売中止で消えていくんですね。良く聞くでしょ、有機リン系はダメだ、ということ。でも農薬は本当のところはわからないでしょ？あとは売る側本人の経済的理由もありますよね。ネオニコチノイドは10ppmから40ppmまで良いと審議されてそうだった。ところがその審議をしたメンバーの1人が住友化学のトップだったんです。「※住友化学」と「※モンサント」は提携しているんです。政治的配慮なんだろうね。だから信用できないよね。

「※住友化学」…基礎化学部門、石油化学部門、情報電子化学部門、健康・農業関連事業部門、医薬品部門をもつ住友グループの中核会社。農業分野ではモンサント社と提携し、自社の除草剤「セレクト」「フルミオキサ

ジン」などをモンサント社と一緒に世界中に販売すると同時に、モンサント社の遺伝子組み換え種子販売にも協力する姿勢を示しており、以前会長だった米倉氏が経団連の会長だった時、TPPを推進したのは自社の利益目的が露骨に絡んでいるという批判があった。

「※モンサント」…遺伝子組み換え作物の種の 90%のシェアを持つ米国の巨大企業。除草剤ラウンドアップは日本でも幅広く使われている。除草剤ラウンドアップとラウンドアップ耐性遺伝子組み換え種のセット販売、種を自家採取した契約農家や遺伝子組み換え菜種が自然に運ばれてきて繁殖した畑の持ち主を特許侵害と訴訟を起こしたり、インドの綿花農家の大量自殺問題の原因を作ったり、ターミネーター遺伝子を組み込んだ自殺する種を作ったりと、様々な問題が世界的に批判を招いている。

質問：農薬を使わないと、どうしても難しい場合があるときは？

→土が健全であることが大事なんです。私もキュウリ、トマト、レタスなどハウスで作っているけど、そんなに大したことないよ、アブラムシも出るけど。そんなに大変なことにはならないですね。慣行農法の人はいくつかアブラムシが出ると農薬をかける。でも、1割ぐらい出ても、まあいいや、と大きな心で見なければいいんです。全部に出ることは無いんです。キュウリにアブラムシが出ると葉っぱがゴニョゴニョになっちゃうでしょ？でも、放っておいたらそこから新芽が出て育ったよ。黙ってみていたらキュウリも強いね。

質問：トウモロコシを無農薬で作るには？

→虫がつかない時期に作るしかないですね。アブラムシというのがトウモロコシに必ずつくのですが、それはトウモロコシが木として一番勢いがあるときに発生するように出来ているんです。例えば、日本では9月～10月は虫が発生する時期なんです。というのは、彼らは越冬して子孫を残す、そういうサイクルになっているんです。今は四季のサイクルが無くなっちゃって、例えば年中ハウレン草がありますよね。でも夏にハウレン草を作るとどうしても病気が出ます。時期が適していないから。そういうことを考えないといけませんよ。良く有機農家が言う事ですが、旬に旬のものを作る、無理をして作らない、ということですね。

質問：端境期は野菜がどうしても作れないのですが、どうしたらいいですか？

→どうしても、というのであれば物理的に強制的に遮断するしかないですね。防虫ネットとかで。しかし、今の時期に出しているのは虫がつかないから、寒さ除けの方が大切だよ。だからあんまり無理をしないで、旬のことをわかった方が良いでしょう。例えば真夏のハウレン草は7月なら30日で育つ。8月なら25日。今のハウレン草は80～90日かかるのが、そんな短い日数で25センチとか大きく育っちゃう。でもそういうハウレン草はペナペナなのよ。そして1週間に1回農薬をかけないとダメ。虫というより病気だよ。

だから旬のものを食べるというのは理にかなっているんです。寒い時にハウレン草はマイナス10℃でも育っている。人間もそういう寒さに会っている。そういう寒さで育ったものを食べた方が元気になるでしょ？東南アジアのバナナを食べているより、よっぽど良いと思います。

質問：ここ数年、異常気象と言われていて、種まきサイクルが狂っていると言われていたのですが？

→そう感じますね。年中異常気象と言っていたのが、もう言わなくなってきてしまった(笑) というのは、私より年配の人に「こういうことは以前あったか？」と聞いて「無かった」というんです。もう地球が壊れ始まっているのではないのでしょうか。でもいくらでも出来ることをやるしかないということで、頑張っています。

50年前と今では少しずつ毎年変わってきています。病気、虫、雑草、新品種。例えばトマトには今までいなかった虫がついている。輸入された葉っぱについていたんでしょうね。たぶん、この国は異常気象もあるけど、飼料とか毎年2000万トン、小麦が800万トンで大豆が400万トンと、合計4000~5000万トンの輸入をしています。だからいくら検査しても検査員が全国で500人ちょっとしかいないのに、5000万トンもチェックできるわけがない。そういう日本に住んでいるんです。

魚介類も500万トン輸入して自給率は30~40%。漁師さんも大変なんです。日本の食は壊れつつあるというか、へんてこりんなことになっていますね。

この前、千葉の料理教室のお母さんたちが10人ぐらい来たんだけど、何を食べるか、といった問題があったけど、目の前のものを食べるのが良いのか、選べるのが良いのか、どっちが良いのか、ってね。

50年前の暮らし方は、そこにある食材をどう料理するのかわかったのが、今は何を食いたいかがあって、それから食材を揃えるでしょ？おかげさま農場の母ちゃんたちは、朝、畑に行きながら、「今、家にあるものは何があったかな？」と考えて、ある素材でどう美味しく食べるかを考えて家に帰ったらパパッと昼ご飯を作る。今の人達はレシピがあって、その素材を集める。何なんだろうね？